施工者に幸あれ 第149回

空間構造デザインのタスキは僕に！ 日本大学理工学部助手・ 鴛海 昂

朝倉幸子◉TH-1
illustration：Taco

■若き獅子

日本大学理工学部建築学科空間構造デザイン研究室の助手，鴛海昂（あきら）さんは1994年生まれの29歳。日本大学理工学部建築学科に進み，大学を主席で卒業した後，大学院を修了した。岡田章名誉教授と宮里直也教授が指導教官をしたのが，秘蔵っ子鴛海昂さんというわけなのだ。空間構造デザイン研究室は，構造家で日本大学名誉教授の斎藤公男さんが築いた研究室。その流れを今後担う立場が助手の鴛海さんなのだ。斎藤先生がA－Forum代表として現役で活動されているのはよく知られる。幸せなことに鴛海さんも，直接指導を受けることもあるという。そもそも意匠設計か構造設計かを選ぶに当たって悩まなかったのかと，数歳年上の編集長が問うと「意匠，構造のどちらに進むか，最後まで悩んだが，明確な答えが出るという意味で構造を選んだ」と，ポジティブな選択であった。

大きな影響を与えて来たのが長く建築業界に携わり，業界に幅広い人脈を持つ父の鴛海浩康さんである。日本大学への進学の際には，「鶏口牛後」の史記を伝えられたという。また，祖父も建築土木系に携わっていたと聞くから建築と無縁ではなかった。また，「今はまだ何も成果が出せていないが，斎藤先生，岡田先生，宮里先生にも負けない成果を残していきたい」と闘志のみなぎる若き獅子であった。

■研究者へ

大学院を修了する頃は人並みに就職活動もした。前職は日建設計であるが，就職が決まった同時期に，いずれ大学へと研究者の道への打診があった。が，一度は構造設計の仕事がしたくて，日建設計へ就職する。当時を振り返ると「一年目はわからないことだらけだった」と率直にいう。大臣認定を必要とする超高層建物の構造設計を含め，多くの建物の構造設計に携わり，学生時代には味わうことのなかった建築に伴う責任の重さを実感した。その後，時期的なタイミングを得て，大学へ戻り研究者の道に入ることにした。三年での円満な退社は，これからも交流できる下地となった。鴛海さんの助手としての忙しい日常は，自身の博士論文の執筆や研究室での研究・設計活動の日々。また，設計に絶対にかかわっていくという決意は，「実際の設計に寄り添った研究や構造設計支援をする」という決意に変わりながら続いている。実際に研究室では組織設計事務所，ゼネコン，アトリエ構造設計事務所への多種多様な設計協力・支援を行っている。研究室は空間構造が専門であり，自身の博士論文は海外で多くの採用実績を有するケーブル系のスタジアム屋根に関して。空間構造の普及という観点から，斎藤先生の系譜を受け継ぎ，張弦梁をより広めていきたいとも考えている。スタジアムを中核にした街おこし的なものも増えますしね，と編集長のいう通り，今後の国内での空間構造の普及に期待を寄せた。

建築はチームでやる要素が多い。が，その感覚に「最近の学生のノリは自分が学生の時とはまた違くて……」と。その一方「わずか５歳くらいの歳差の学生たちなのだ。気質は違ってもワークショップなどを活用して，みんなを巻き込んで建築をしたい！」。大学時代には母校の高等学校のバスケットボール部のコーチを３年間したという。だから鴛海さんは人に教えるのは好きな方だ，と語る。教育者の道にギアチェンジできた理由がわかるというものだ。研究室のモットーが，「よく遊び，よく学ぶ」。宮里教授と鴛海さんによる日本大学理工学部空間構造デザイン研究室が益々楽しみなのです。